

情報学教育の第2ステージ

教職実践を視野に K-12 から K-18 へ

情報学教育フォーラム議長 松原伸一

1. はじめに

情報学教育の第2ステージとは、高等教育への拡大を意味し、初等中等教育を第1ステージとして円滑な接続をねらいとしている⁽¹⁾。

筆者は、日本学術会議において「情報学分野の参照規準」の策定に向けて努力されていることを承知し、情報学教育に関心を寄せるひとりとして大いに期待しているところである。

しかしながら、高等教育は大学や大学院における高度な専門教育であり、その専門性は深遠でかつ広大であるため、それ自体を情報学教育の第2ステージの中心にはしていない。

したがって、情報学教育の第2ステージとは、高等教育の中でも、特に、教職実践を専門とする分野(研究分野を含む)を中心とすることで、第1ステージとの接続を効果的かつ円滑に進めることができるものと考えている。

2. 教職実践のための情報学

教職実践は、学校教育に関わるものにとって共通の関心事といえるだろう。中央教育審議会の「今後の教員養成・免許制度の在り方について」(答申, 2006年7月11日)では、①教職課程の質的水準の向上、②「教職大学院制度」の創設、などに加えて、その他関係する広範で具体的な政策の提示が行われ、その後、関係する法令(例えば、教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令など)が施行され現在に至っている。

①教職実践演習(仮称)

上記答申の別添1より引用すれば、これは、教職課程の他の授業科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて、学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものであり、いわば全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」として位置付けられる。

本学教育学部でも、2010年度以降に入学したのから、4年次における必修科目を設置し、2013年度より実施している。

②教職実践における情報学

筆者は、初等中等教育における情報学教育

をテーマに、いわゆる「情報学教育としての K-12 カリキュラム」の構築を進めてきた。現時点では、カリキュラム開発研究として、コアフレームワーク(学習の全体骨子)、ストランド(学習項目)を分析整理して、情報安全、情報倫理、情報人権、情報社会、情報経済、情報法規、情報健康、情報公開、…などの各項目について具体的な提案を行っている。

この度は、これらの更なる発展形として、K-12 を K-16 へ、さらには、K-18 への展開を念頭に情報学教育の充実を進めたい。現時点では、筆者の身近なところから始め、およそ図1のように整理している。

K-12 から K-18 へ

K-12: 幼及び小中高(12年間)が対象

いわゆる「学校教育」で、教育要領(幼稚園)、学習指導要領(小中高)が重要な意味を持つ。

K-16: 上記に大学を加えた16年間で対象

K-12との接続を考慮して教養教育を対象とし、教員養成、教員研修、地域貢献などを視野に入れる。

K-18: 上記に大学院(教職大学院)を加えた18年間で対象

例えば、学校教育が直面する諸課題の構造的・総合的な理解に立つて幅広く指導性を発揮できる教員(スクールリーダー)の養成を視野に入れた情報学教育

図1 K-12, K-16, 及び, K-18 の概要

3. おわりに

情報学教育は、教職実践というキーワードに着目すれば、第1ステージから第2ステージへの展開は、緊急かつ重大な課題である。

筆者は、教育の新国際化、新科学化、新情報化などをテーマにカリキュラム開発研究を行ってきたが、情報に関する研究分野の深遠なる学問の歴史を痛感している。情報学教育の充実のためには、皆様のご理解とご協力を引き続き賜りたいと思います。

参考文献

- (1)松原伸一: 情報学教育のパースペクティブ～情報思考(Info-thinking)の提案～, 情報学教育研究2015, pp.13-22, 2015,